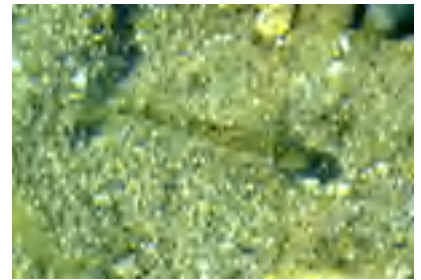


鴨川は京都市北区雲ヶ畑の棧敷ヶ岳付近を源流とする、淀川水系に属する1級河川である。鞍馬川、高野川などをあわせながら京都市内を南北に貫流し、伏見区下鳥羽付近で桂川に流れ込む。沿川には上賀茂神社、下鴨神社、鳥羽離宮跡などの旧跡が点在し、歴史上にもよく登場する河川である。現在は京都市中心部周辺が都市化し、高水敷内には遊歩道が設けられるなど都市河川として整備された姿となり、京都を代表する景観として一般に広く利用されている。



鴨川の魚類相についてはいくつかの報告があり（川那部ほか 1976, 石田ほか 2007）、1976年の報告では18種、2007年の報告では23種が記録されている。2007年の報告では、1976年に記録があったズナガニゴイとタイリクバラタナゴが採集されておらず、かわってオオクチバスとブルーギルが採集されている。これらの調査はいずれも鴨川支流の高野川と、高野川に合流するまでの賀茂川を調査地としており、鴨川中・下流部の魚類相についての情報は少ない。



2011年より京都市伏見区に勤務先が変わった演者は、目の前を流れる鴨川を唯一の心の拠り所(?)とし、昼休みを中心に、時には出勤前や夜間にも足を運んで、観察を続けてきた。その中で思わぬ希少種との出会いや、外来生物の確認など、先行研究とは異なるいくつかの発見があり、また観察場所がこれまで報告のほとんどない鴨川中・下流部であることから、貴重な観察事例になるのではないかと考えはじめた。

観察は、桂川の合流地点から約4.5kmの地点を中心とした範囲で行っている。約300~1000mおきに堰堤により区切られており、その湛水区間では流れが遅く、水深1m以上に達するところがある。一方、堰堤直下からしばらくの間は自然な河川形態となっており洲の発達もみられるが、水深30cm前後の浅く単調な平瀬が続く箇所がほとんどである。これまでに観察された主な魚類は、堰による湛水区間では、オオクチバス、ナマズ、コイ、コウライニゴイ、カマツカ、ギギなど、平瀬では、アユ、オイカワ、カワヨシノボリなど、わずかに残された植生帯や樋門付近では、ブルーギル、ヌマムツ、ムギツク、モツゴ、ギンブナ、カネヒラなどである。本報告では、わずか45分の昼休みの観察結果から考察した、鴨川中下流部の魚類を中心とした生物相、人とのかかわり、外来魚の侵入経路などを述べたいと思う。



<引用文献>

川那部浩哉・丸山 隆・谷田一三・富田恒男. 1974. 京都府下の淡水魚.

京都の野生動物（自然環境保全のための基礎資料）. 京都府公害対策室、京都.

石田裕子・中林真人・竹門康弘・池淵周一. 2007. 堰堤で仕切られた都市河川の魚類相と生息場の特性. 京都大学防災研究所年報第50号.